2022.5 月版（第 2 版）　HSU 出版会

新しい学問の創造を目指して

聞慧資料①　HSU が探究する学問とは何か

以下にあるように、大川総裁の考える「学問」とは、次のような特徴があります。

まず、「未来志向」「ユートピア志向」です。過去の分析や文献の解釈ではなく、あくまでも未来の発展につながる貢献を志すものを求めていく姿勢です。

次に、「文献引用」や「細分化」を必ずしも重視しないという姿勢です。文献を引用する必要がないとまでは言わないにしても、「文献リストや注釈がなければ論文とはみなさない」という考え方は明確に否定しています。「細分化」も学問の条件とはしておらず、むしろ「統合の学」を志向します。

さらに「実用性」を重視しています。文献リストなしに未来志向になると、一歩間違えば空理空論になります。そこで実用性を重んじることで、空論化を防ぐ考え方も取り入れています。

以上の考え方をベースに、ユートピア学術賞では、①ユートピア価値、②独創性、③実用性、④学術的体裁の順に評価することにしています。

「学術的体裁」については、文献リストや注釈の有無を問うものではなく、合理的で論理的、客観的な説明ができているか――という趣旨で理解していただければと思います（主観で文章を綴るエッセイとは異なるという趣旨です）。

学問とは何か

私たちは、今、幸福の科学大学（ＨＳＵ）設立のために、大きな運動を起こしています。

現代は、数多くの学問がいろいろな大学で教えられており、そうした学問を通して得られた知識が教育となり、人々の頭脳の力、考える力となることによって、世の中で有利になったり、世の中を少しでも前進させ、便利にさせる力になったりしていますが、私は、それを否定していません。

食料に飢えたり、あるいは、住む所もない人々、飲む水も十分にない人々、家族の健康を守れないでいる人々、道路をつくりたくてもつくれず、橋を架けたくても架けることができない貧しい国々、そういう世界に住む人々に、学問の力によって、新しい知識を与え、高度な智慧を与え、この世においても救い、発展させていくことは、とても大事なことだと思います。

しかし、この学問に、もう一段の力が必要です。「智慧の光」が必要なのです。

「何のための学問であるのか。何のための知識であるのか。何のために賢くなり、何のために、専門家として、今、尊敬されているのか」ということです。

そして、その知識の量ゆえに、多くの人々から尊敬を受けている人々は、「あなたがたの発言は、多くの人々を救うこともでき、また、迷わすこともできるのだ」ということを、知ってください。

知識というものは、それ自体は価値中立的なものです。

知識そのものは何らかの役に立つように見えて、人に害を与えることも、また、人を幸福にすることもできます。

人を幸福にする知識か。それとも、人に害を与えたり、結果的に、人を苦しめたり悲しめたりするこ

とにつながっていく知識かどうか。
　これを分けるものが、「智慧の力」なのです。

『智慧の法』5

　今、できている大学というのは、その多くが明治期に考えられたものです。「封建時代が終わり、文明開化し、西洋化していく社会のなかで、必要な人材を育てる」ということで、幕府の時代に儒学等を勉強していた方々が洋学に切り換えていく流れのなかで、大学ができてきたのです。
　ただ、それは、明治の上り坂のころにはうまくいったかもしれませんが、大正・昭和期に至り、先の大戦での敗北を経たあと、次第しだいに、国家としてのアイデンティティーや未来ビジョンがはっきりと見えなくなってきたところがあると思うのです。
　今、このあたりで、福沢諭吉の唱えた「脱亜入欧」的な考え方だけでは済まない時期が来たのではないかと感じています。
　その意味で、「日本独自のオリジナルな文化を発信できるようなもの」が必要であると同時に、明治以降、さまざまに移入された外国のものをもとに、キリスト教文化圏以外のものについても目を配りながら、「今後の世界は、どうなるべきか」ということをデザインしていく力が必要だと思うのです。
　したがって、今、あえて新しい大学を創り、世に問う理由があるとすれば、それは、「新文明の発信基地」としての大学、「新しい学問を創造する場」としての大学を創りたいということです。

『新しき大学の理念』1

「『新しい創造』を含んだものをつくっていきたい」と思いますし、「『創造性』『チャレンジ』というものを中心に据えた学問を、教授と学生が協同しながらつくり上げていくようなものにしたい」と考えています。（略）キーワードとして、「新しい創造」や「未来への貢献」を挙げたいと思います。

『新しき大学の理念』1

　日本の学問は、「外国のものを受け入れつつも、実用主義の面がかなり弱い」という特徴があります。

『新しき大学の理念』2

　今の大学は、「創造の現場」としてはあまり機能していないと思います。

『新しき大学の理念』2

　結局、学問が専門分化していく理由としては、「個人個人の能力の限界がある」ということが大きいでしょう。（中略）何とか、共通ベースのところは練り上げ、そこから発想できるような人間になってほしいのです。そして、常に原点に立ち返って、自分の学問を、もう一回、考え直してみるのです。先ほど、「動機が善であるか」「私心がないか」ということを述べましたが、別の言い方をすれば、「神仏の目から見て、自分のやろうとしていることは正しいのか」「自分の学問研究や職業の成就は、はたして正しいことなのか」ということです。

『新しき大学の理念』4

　学問のミッションとして、「世界を正しい方向に発展させたい」という願いを付け加えるならば、一定の価値判断を伴う考え方から無縁ではありえないでしょう。

『新しき大学の理念』5

（霊言について）「“生”のまま、宗教の布教に似たようなかたちを取るか。それとも、そのなかから、この世的に使えるものを抽出し、再構成して使うか」ということは、別途、あってもよいのではないかと思います。（中略）

要は、「それを、どのようなかたちで抽出し、学問適性のあるかたちにするか」ということなのではないかと思います。

『新しき大学の理念』10

学問はあくまでも、この世の世界において現れたる事象のなかから、ある程度、原因・結果の法則や、功罪、あるいは、幸福・不幸の原理等を見極めていく必要があるでしょう。

これは、決して、「死後の世界を、科学的に、あるいは、学問的に探究しよう」という試みを排除する考えではありませんが、あくまでも学問として立てようとする以上、この世的な部分での原因・結果の法則をも十分に念頭に置いたアプローチでなければならないと思います。

例えば、死後の世界について、宗教の側からは、いろいろな霊界のリサーチがなされていますけれども、「それを、どのように、この世の世界の生き方、人間としての生き方に反映できるのか」という観点を入れ、それを抽出し、教訓として取り出すことができるならば、「学問としての機能」を十分に果たしつつ、「宗教としての機能」とは違う面を出すことができるのではないでしょうか。

『「人間幸福学」とは何か』4

今は、学術書や学術論文には、必ず、いろいろと引用したものを、「注」のかたちでたくさん後ろにベタベタと付けて、「どこから引用しました」というのが分かるようにしています。権威のある先生の名前とか、書名とか、あるいはページ数とか、引用を付けて書くのが学問性のある書き方ということで指導されていると思うのですが、この『善の研究』には、注は一つも入っていません。

つまり、全編、西田幾多郎が考えて、書き下ろした思想そのものなのです。何にも注はありません。本文中に、ときどき、哲学者の名前、あるいは、本の名前がチラチラとは出てきますが、基本的に、「ここから引用した」という注は一カ所もありません。

これが、「彼の思想はオリジナリティーがあって、独創的だ」と言われる理由の一つでしょう。考える人であって、「考えつつ思想を紡ぎ、書きつつ考える」という人であったために、日本で初めての独創的な哲学者が出来上がったと思うのです。

この方法自体は、基本的に私も同じです。私は、数多く本を書いており、そのなかで、「他の著者や他の本は、こういうことを言っている」と言及することはありますが、巻末に注で、いろいろな引用元を示して、論文を作成するように本を書くということはありません。

要するに、「自分の考えとして述べている」ということです。

「それは学術的ではない」と思う人は、二番煎じの学問を「学問だ」と思っている人であって、オリジナルというのは、だいたい、こういうものです。自分の頭から紡ぎ出していった思想を語り、それが本になったものが、オリジナルなのです。古代の哲学者もみな、そうだと思います。

「それを研究し、つなぎ合わせて論文として書き、学位論文など、いろいろなものとして認められる」というのは、そういう論文の書き方の指導を受けて綴られた論文ないし本であるということで、「二番煎じ以降の思想家の思想と、オリジナルの根本思想を説く人の思想とは違うのだ」ということは知っていただきたいと思います。

『西田幾多郎の「善の研究」と幸福の科学の基本教学「幸福の原理」を対比する』1

西洋の学問のもとはソクラテスでしょう。アリストテレスを「学問の祖」と言う場合もありますけれども、その“先生の先生”がソクラテスですので、「もとはソクラテスである」と考えてよいのではない

かと思います。

『ソクラテス「学問とは何か」を語る』1

意外に、対話篇風にやったものが「普遍性」があるのです。きちっと書き下ろしたものよりも、人と対話したようなものは、その当時の相手と場所とシチュエーションによって内容は変わるとは思うのですが、そうした、その時代にとって当然の会話だと思われるようなものが、時代を超えて遺っているというのが、まことに不思議なところです。

仏陀のお経なども、ほとんどが、弟子との対話篇でできあがっているのです。「きっちりとした論文のように完成したものだけが、普遍的なものだ」という考えは間違いです。こうした対話のようなものが、意外に普遍性があり、長く読み継がれるものだということは、知っておいたほうがよいと思います。

これは、中国でもそうです。孔子の『論語』も弟子が編纂したものでしょうが、孔子との「対話篇」です。「孔子先生があのとき、こう言ったね。ああ言ったね」というのを、皆で思い出して編纂したものです。やはり、相手がいて、孔子がそのとき、その人に対して、どういうシチュエーションで、どういう言葉を述べたかを、書き留めてまとめたものです。こういうものが、やはり教えの中心になっています。

老子のものは短いですけれども、荘子にも、「対話篇」のようなものは、そうとう遺っています。ですから、意外に、「対話篇だから学問性はない」というような考え方は間違いです。その警句というか、相手に対する一転語として出されている言葉のなかに、非常に本質を突いたものや、「目覚めの言葉」が入っているものであり、後々まで、けっこう遺るものだということです。

イエスも、やはり、弟子との間や、あるいは敵との間にやりとりされた言葉が『聖書』のなかにそうとう遺っていて、それが長く、二千年、読まれているわけです。イエス自身がペンを取って書いたものでは、決してありません。ほかの人が、「イエスは、あのときこう言ったよね」ということを、それぞれ、皆で思い出して書いたので、何種類かの『聖書』が存在するわけです。覚えているところや人から聞いたところが少しずつ違うので、何種類かの福音書が存在するということです。

そういう意味で、「対話篇風のものは、意外に、根源的な思想の確立と関係があるのだ」ということは、知っておいたほうがよいと思います。

『アリストテレスはかく語りき』1

「ＨＳＵ」は、あくまでも学問の総本山である。未来の学問の種は、すべてここにある。未来文明の源流であり、この国と世界の国々を新しく創りかえていくための原動力であると考えている。

『光り輝く人となるためには』あとがき

真の学問には、「真」「善」「美」が存在しなくてはなるまい。それは、神から降りたイデアの再発見でもある。したがって、学問の根底には、聖なる宗教の存在が必要となる。

『光り輝く人となるためには』あとがき

経済学においてもそうですし、法学、政治学、社会学においてもそうですが、「何らかの精神作用や人間の心の働きというものも見なければ、やはり、学問としては、社会科学さえ成り立たない。人文科学、社会科学とも、『心』というものをまったく無視しては成り立たないものだ」ということを知ったほうがよいでしょう。

『幸福の科学大学創立者の精神を学ぶ１（概論）』2

結局、学問そのものは、この地上に人間として生まれて、見聞きし、体験し、感じ取る森羅万象について、「真理とは何か」を探究することです。

あるいは、もっと広げれば、「真・善・美」でしょう。やはり、「真理とは何か」「善とは何か」「美とは何か」ということを探究していくところに、学問の本質があるのです。

『幸福の科学大学創立者の精神を学ぶ２（概論）』1

森羅万象を対象にして、「真・善・美」を探究していくとなると、非常に広い範囲になります。（中略）

そういうものを知ろうとしたら、やはり膨大なエネルギーや時間が必要になってくるでしょう。また、「こうしたことは、とうてい一人の人間には無理だ」というのが、一般的な学者の見解です。そのために、作法として範囲を狭め、その部分だけ専門文献を厚くして調べるわけです。

『幸福の科学大学創立者の精神を学ぶ２（概論）』1

若干、恥ずかしい話ではありますが、専門家として認められるために、できるだけ対象の幅を狭くするのみならず、できるだけテクニカルな方法でそうなれるようなハウツーが流行っているのが、学問の実態だと思うのです。（中略）

しかし、私は、「学問の本質とは、真理の探究から始まっていくものだ」と思いますし、その真理とは、やはり好奇心がもとにはなるものの、できるだけ幅広く、深く、遠くまで見通したいものだと考えています。

もちろん、人間の能力には限界があるかもしれませんが、それを克服していく方法として、前述したような「簡便に職業に就ける方向を選ぶ」というテクニカルなものばかりに取り組んではいけないでしょう。

「いかにうまく切り貼りをして、論文を書くか」というような“切り貼り術”的なやり方で、プロフェッショナルかどうかを判定するべきではありません。

やはり、「本質的に何か訴えるべきもの」「本質的にコアになる部分」「核になる部分」「まだ誰も見つけていないもの」「誰も発見していないもの」を見つけていくことが、学問の基本的な態度だと思います。

ただ、一つのものを探究していく間に、ずいぶん時間がかかるので、それで力尽きてしまう人が大部分ではありましょうが、本当はそれだけで分かってはいないはずです。ほかのものも勉強していかないと、総合的には分からない部分が、かなりあるわけです。

『幸福の科学大学創立者の精神を学ぶ２￥2（概論）』1

それぞれの学問には、分類があるようでありつつも、実は垣根の部分は非常に曖昧なところがあります。例えば、「法律学」や「政治学」といっても、その奥には、「哲学」もあれば、「神学」もあるわけです。そういう意味では、法哲学の勉強をすれば、結局、宗教の勉強も必要になってくるのです。

『幸福の科学大学創立者の精神を学ぶ２（概論）』1

「いろいろと読んでミックスされたもののなかから、何を搾り出し、結晶化させていくか」という技術を身につけることが大切です。

また、そうした技術に、「本質を見抜く直観力」というものが伴わなければ、本などの最終生産物をつくることはできません。やはり、最終生産物として結晶化させなければ意味がなく、単なる「時間の無駄」「金の無駄」「空間の無駄」であることが多いのです。

大部分の学者は、この「知的生産の技術」が身についていません。そのため、一生の間に数多くの本を読んでいたとしても、せいぜい修士論文や博士論文として書いたものをまとめて本にするぐらいでしょう。（中略）

いずれにしても、その人がどのくらい勉強しているかということは、例えば、一年間で書ける論文数や著書数を見れば明らかに分かります。

『幸福の科学大学創立者の精神を学ぶ２（概論）』1

今、細分化しすぎて分からなくなっているもので、それぞれの専門家が“小さな虫のような目”で見ているものに対し、“全体を鳥瞰した目”で見えるような学問的な力が必要でしょう。

そういう目を持つことなく、拡散ばかりを続けていったら、お互いに部分的なことしか分からない人ばかりが議論するような世界になります。

しかし、国の運営あるいは世界の運営ということを考えれば、その拡散している知識体系を鳥瞰して価値判断できるような目が必要だと思うのです。

「『諸学問の開拓』をすると同時に『諸学問の統合』をする」ということは、はっきり言えば、十倍ぐらいのエネルギーがかかることではありますが、私はこうしたことを学生時代に志しました。

今、私は新しい学問をつくろうと努力していますけれども、実際には、さまざまな勉強をした学生時代に、「どれも分析的に分解していくかたちの学問ばかりであり、ある部分だけの専門家であって、ほかのことは分からない。これでは本当の社会的事象が何も分からなくなる」ということに気づいていたわけです。（中略）

やはり基本的には、志を持って、知的努力を重ねることを習慣化し、さらに、それを単なる労働のように日々続けていくのではなく、その“結晶”としての「最終生産物」を何か生み出していこうとする努力が大事だと思います。

『幸福の科学大学創立者の精神を学ぶ２（概論）』1

大きな視野を持って多くの人々に影響を与える仕事をしようとするならば、大きな志を持ち、それなりの知的努力をしながら関心領域を広げ、最終的には、何らかの情報なり知識なりを「結晶化」させ、世の中の役に立つかたちで「発信」することが必要です。

『幸福の科学大学創立者の精神を学ぶ２（概論）』1

幸福の科学の活動体系、教学体系のなかから、学問性のあるところを抽出し、整理し、それを体系化して教えられるようにしていくことが、幸福の科学大学の仕事であり、その教員たちの仕事だと思うのです。

『究極の国家成長戦略としての「幸福の科学大学の挑戦」』1

実際に大学で教えているものに実用性がないところが、問題なんですよ。

最近、幸福の科学学園から東大に入った学生が発表していましたが、国際政治のオリエンテーション的な授業を聞いたところ、最初に、「私は、国際政治を教えていますが、国際政治についてはまったく分かりません」と話していたそうです。

『究極の国家成長戦略としての「幸福の科学大学の挑戦」』1

当会が出している雑誌（※リバティのこと）に載っているメインの時事問題についても、的確な、学問的な裏づけのある分析をして、情報を出しているので、それを読んでいると、ちゃんと論文が書けるわけです。

あらゆる分野において話題になったものをすべて捉えてありますから、もし、大学の先生のほうが「ザ・リバティ」を読んでいなかったら、実は、ものすごく切れ味のいい小論文が書けてしまうんです

よね。
　ですから、学問性はちゃんとあるんです。このあたりが違うわけですね。
『究極の国家成長戦略としての「幸福の科学大学の挑戦」』10

　哲学には全部入っているので、これがバラバラに、いちおう専門分化していったのでしょう。それは「狭い範囲にして専門家がつくる」という意味では、それなりに役に立ったけれども、パラパラになりすぎて、“有機的統合”ができないために、相互の化学反応のようなかたちでのイノベーション及び新しいものを創生していく力が足りないのです。
　ここが今、大事なのです。「全部を触媒として、これを変化させていくものは何か」と言うと、これは、「幸福の科学」という言葉で表されているものです。諸学問や諸宗教がありますし、別に、当会は、キリスト教も、仏教も、イスラム教も、日本神道も否定せずに受け入れていますし、今も研究を続けています。
　それを、どうするかといえば、単にバラバラに小さく専門分化していって、虫の分解のようにしていくわけです。バラバラにして、羽を取って、頭を取って、足を取って終わりではないのです。それが学問だと思っているのなら、それは一面的な見方です。分析的学問も、学問ですけれども、統合する能力がなかったら、実は何にも役に立たないのです。
　分析する研究は大事です。しかし、統合も要るのです。分析もしますが、それをまとめて、「次の時代に何が使えるようなものになってくるか」ということを考えて、統合しなければいけません。
『究極の国家成長戦略としての「幸福の科学大学の挑戦」』11

　怖いのは、例えば、幸福の科学大学の教授陣をつくろうと考えて、幸福の科学の信者子弟を、さまざまな大学の宗教学部や宗教学科、あるいは神学部等に入れますと、信仰心がなくなっていくおそれがあるんですよ。要するに、宗教学者は信仰心がないんです。理科の実験でもしているかのように、その宗教活動や教義等を見る。虫でも観察するように、他人事のように見る癖があるんです。
　「それが学問的態度だ」とおっしゃるのでしょう。しかし、それでも、例えば、修道会のようなところが経営している大学、カトリックでもプロテスタントでも何でも構いませんが、修道院が付いているような大学の場合、信仰を否定しての宗教学のようなものは成立しませんよ。
　基本的に、「神様を信じていませんが、宗教学を講じています」というのはありえないことで、このへんのところは、学問のほうに問題があるのではないでしょうか。
『究極の国家成長戦略としての「幸福の科学大学の挑戦」』11

人間幸福学

　「人間幸福学」とは、いわゆる「幸福の科学」学を、宗教的側面からではなく、一種の一般教養としても、あるいは、専門的な知識やスキルとしても使えるようなかたちで提供していくものであり、「『こういう考え方をしていけば、人間は幸福になることができる』ということを、さまざまな経験や教えのなかから抽出し、それを一般化していく」という努力であります。そして、そのなかには、研究としての面もあると思うのです。（中略）学問の力によって、例えば、他の宗教や思想、哲学等との比較において、幸福の科学の教えを「人間幸福学」として逆照射し、再検討してみるという面もあるのではないかと考えます。
『新しき大学の理念』3

そのように、「人間を幸福にしない哲学や思想」も存在します。もちろん、それも、研究の対象としてはあってもよいと思うのですが、「いかなる考えがネックになって、人を不幸にしたり、社会システムをマイナスの方向に引っ張っているか」という観点から研究すべきでしょう。

やはり、「どういう考え方を取れば、繁栄したり、個人的にも成功したりするのか。さらには、組織、あるいは社会として、うまくいくのか」というようなことを学びたいものです。

したがって、中心的な思想としては、宗教や哲学、思想に近い部分での「人間幸福学」というものを、ある程度、人文系の教養から発達したものとして研究したいと思っています。

『新しき大学の理念』3

あらゆる領域の学問活動、および、人間の諸活動を「人間幸福学」という名前で統括し、「人間が構成している社会」を基本テーマとしつつ、「人間が構成している社会が、どうすれば、『個人としての幸福』と『全体としての幸福』を増加させていくことができるか」という大きなテーマに対して、大学という研究機関を用いることで末永く研究していこうという考え方なのです。

ここには、現在ただいまの問題も、当然視野に入っていますが、五年後、十年後、二十年後、あるいは、百年後に起きることであっても、このテーマであれば、新たな問題として探究していくことができると思います。（中略）

現在の私たちの頭にはテーマとして、ないものであっても、また、未知なるものや、まだ接近してきていないものであっても、その立場に立った場合には、必ず、その問題解決を図り、人類の社会を幸福に導くための方法を構築できるかどうか。そうしたことに対して、文系・理系を問わず、総合的に取り組んでいこうという学問であり、大学です。

言葉を換えれば、やや宗教的な言い回しになるものの、「幸福の科学の理論を用いて、この世を現実的に「ユートピア社会」へと変えるための具体的な智慧や方策はあるのか」ということを、日々の研究のなかで積み重ねていき、その結実たる成果を発表し、世の中に影響を与えていくことが使命であると考えています。

『「人間幸福学」とは何か』1

今、新しいステージに立ち、「人間幸福学」という観点から、もう一度、諸学問を見直してみることは、かつての哲学の立場でもあり、また、諸宗教が学問化された場合の結論でもあり、さらには、近代において宗教の枠から外れていった科学をも取り込んで、もう一段の価値判断を構築する作業であると言えるでしょう。

私たちの基本的な考えとして、人間とは、「この世に生まれてきたからには、この世で生きていく間に自分の人生を光り輝かせていく」だけでなく、「共に住む他の人々や同胞たちと、あるいは、国を超えて、他の国との関係においても、幸福な社会をつくっていく」という使命を負っている存在だと捉えています。そのために、知識ベースとして役立つものを、できるだけ学問のかたちで確立し、それを提供できるようになっていきたいと考えているのです。

その対象は、今後とも、まだまだ広がっていく余地はあるでしょうし、出発点においては、極めて形而上学的なのかもしれません。しかし、かつての哲学や宗教、その他の諸思想がそれぞれに求めていたものを、現代の時点において、いったん再整理し、「人間の幸福」という観点からまとめ直してみようという試みであるわけです。

『「人間幸福学」とは何か』3

「人間幸福学」のなかには、「人間を幸福にするか否か」という観点からの価値判断を含まなければいけないのではないでしょうか。

『「人間幸福学」とは何か』5

人間幸福学は、「社会生態学」としても、この社会の生態を、いろいろな角度から分析していく武器になっていくのではないかと思っています。
いずれにせよ、人間幸福学の下に、現代のあらゆる学問が再検討されるべきであると考えますし、その立場は、決して恥じるべきものではなく、「ソクラテス的立場そのものである」と言うべきです。むしろ、「『学問の始まり』に戻ったのである」と言えるのではないでしょうか。

『「人間幸福学」とは何か』6

「人間幸福学」とは、人類にとって永遠のテーマであり、「悠久なるものの影」を宿した、根源的かつ普遍的な学問である。
かつてのギリシャ哲学が形骸化し、仏教もキリスト教も救済力を失いつつある今、もっとラディカルで本質的な思想を教える学問が必要である。「人間は何のために学問をするのか」という問いに答えうる学問が必要である。（中略）
つまり、「人間幸福学」とは、「学問の挑戦とは何か」を自覚させ、研究させ続けるための学問でもある。

『「人間幸福学」とは何か』あとがき

実際、哲学も、思った以上に“ガラクタの山”のようになっているということでしょう。これを全部剥ぎ取らなければいけないわけです。その周りに付いた牡蠣殻のようなものを全部取らなければいけません。宗教もそうですし、哲学もそうです。哲学も宗教も神学も、全部、“ガラガラポン”の世界に入ろうとしているわけであり、ましてや、末流の諸学問などというのは、もはや“ごみ溜め”のようなものであるので、これと戦わなければいけないのでしょう。
そういう意味では、恐れてはならないということだと思います。

『ソクラテス「学問とは何か」を語る』13

経営成功学

これを、さらに専門化・具体化する意味で、例えば、「経営成功学部」では、「企業をつくって成功させる」という考えもあれば、「どうやって、よい仕事をしていくか。どうすれば、企業のなかで働きながら、個人的にも、家族においても守られ、成功していく生き方ができるか」といった研究をすることも考えています。人間幸福学の、具体的な展開、あるいは、プラグマティックな展開として、「経営成功学部」も開きたいのです。（中略）
これには、「成功」という言葉を付けました。
「人間幸福学部」と「人間不幸学部」の両方が成り立つように、「経営成功学部」も「経営失敗学部」も成り立つわけですが、わざわざ、経営失敗学部をつくって教える必要はないでしょう。もちろん、反対の手本、反面教師として、失敗した企業等の研究、「なぜ失敗したのか」という研究はあっても構わないと思いますが、中心的には、「なぜ成功したのか」ということを考えたいのです。
ここでは、日本において成功した松下幸之助をはじめ、さまざまな企業人もいますので、そういう企業人の研究もしてみたいと思います。
また、戦後、アメリカから、P・F・ドラッカーのような方の思想が日本に入ってきて、「それを学ぶことによって、戦後始まった小さな町工場が、世界的な企業になり、数万、あるいは十万、二十万人の

社員を養うまでに成長した」というケースもありますので、「なぜ、そういう成功をしたのか」ということを、人間幸福学的な視点も踏まえながら、プラグマティックに研究していきたいのです。「どういう考え方が、その成功をつくり出していったのか」ということです。

『新しき大学の理念』3

「経営成功学部」においては、「経営」に「成功」という言葉を付けたわけですが、これは、「結果に対する責任」が入っていることを意味しています。

「経営」だけを言うのであれば、経営に成功しても失敗してもよいわけでしょうが、「経営成功学」には、「結果において、『成功しない経営』というのは望ましくない。結果において成功していただきたい」という価値判断が一つ入っているのです。

『「経営成功学」とは何か』1

どの業界も打率三割が精いっぱいであるのでしょうが、そのなかにあって、あくまでも、「百戦百勝する方法は、はたして存在するか。科学的、学問的にありうるか」ということを追究してみたいと思います。

それを理論的に追究し、実践面でも、現在進行形の会社や、過去に存在した会社等についても研究して、「経営成功学」なるものが成立するかどうか、学問的に研究してみたいのです。

『「経営成功学」とは何か』1

もし、この「経営成功学」というものを、学問としてくくり出すことに成功できたら、その内容を授業で聴いた人が企業家として成功するだけではなく、国全体の富を増すことにも必ずなるでしょうし、この国における税収減や財政赤字体質を改善する力になる可能性もあるのです。

『「経営成功学」とは何か』1

経営成功学を成功させることによって、百発百中、十割の企業が黒字体質になる方法をつかみ出し、そして、「学習できるもの」という仮定、仮説の下に、それを学問化する努力を試みたいと考えているのです。

『「経営成功学」とは何か』1

経営成功学では、「経営は、なぜ失敗し、なぜ成功するのか」ということを見極める方法を教え、「どうやったら、あらゆる業種において経営に成功していく方法をつくることができるか」というテーマに挑んでいきたいと考えています。

『「経営成功学」とは何か』1

未来産業学部

（宗教と科学の対立に関して）考え方のもとは、「未来がさらによりよくなる」ということです。

『新しき大学の理念』8

「未来産業学部」は、国家百年の計から三百年の計を持ちつつも、はるかなる無限遠点を見つめなくてはなるまい。

できうる限り宇宙の秘密を明かし、未来文明の源流を創造してほしいと願っている。

『「未来産業学」とは何か』まえがき

一つには「宗教性」、すなわち、「神の存在を前提にした宇宙や世界観を否定しないかたちで、真理を探究していく姿勢を持っていただきたい」ということと、もう一つは「国際性」、すなわち、「最低限、自由自在に研究ができ、仕事ができるところまでの英語力をつけていただきたい」ということを考えているのです。そのため、この部分の重みが少しだけかかります。

『「未来産業学」とは何か』1

ほかの大学ですでに研究されており、今後も研究が続いていって十分に成功すると思われる分野については、実を言うと、あまり関心がないのです。

『「未来産業学」とは何か』1

「これからの『未来文明の源流』になるものを研究しないで、どこを研究するのか」というところです。

ほかの理系学部が「非現実だ」「空想だ」「そんなことありえないよ」などと言って、まだあまり手が出ないようなところにチャレンジしていかなければ、やはり、新しい学部をつくる意味はないのではないかと、基本的には思っています。

『「未来産業学」とは何か』1

「今はまだ、この世にはほとんど存在していないもの」、あるいは、「『こんなものがあったらいいな』といった端緒、きっかけのようなものはすでにあっても、まだかたちにはなっていないもの」、要するに、正式に、カチッとした“産業のレール”の上を走っていない、そうした分野を開拓せずして、新しい大学で未来産業学部をつくる意味などないと考えているのです。

『「未来産業学」とは何か』1

この世において非常に実用性の高い学問も、実際に考えていただきたいのです。予算的な面で見れば、ある意味での「資金回収」がついてくることにもなるでしょうし、おそらく、大学の理系学部として長く存続していくだけの“足腰”の部分にもなることでしょう。

そういう観点で、「この世のニーズを満たす部門」での実用性のあるものの学問研究も考えていきたいと思っています。

『「未来産業学」とは何か』1

一つは、「現実に、近未来社会においてニーズが生じるものに関し、そのニーズを満たせるような『役に立つ未来産業の種』を考えついてチャレンジしていく」という試みです。要するに、科学の“足腰”に当たる部分です。

もう一つは、足腰ではなく、“頭脳”の方面が中心になりますけれども、「宇宙の未知なる部分について解明、解決していく技術を開発する」ということです。

そのなかには、例えば、「多次元の解明」から、「宇宙航行の方法」、それからＵＦＯなるものが存在するとしたら、その「ＵＦＯの推進原理」や「エネルギー源の解明」等があるでしょう。また、他の惑星に生命体があるとしたら、「地球外生命体の研究や、交流の仕方」等の研究もあるでしょう。

『「未来産業学」とは何か』1

未来創造学

産業をつくるのではなく、法律や政治、行政行為、および組織理念など、「未来学」の文系的な部分を基礎にして、「どのような未来社会を構築していくべきか」という観点から考えてみようということです。
今のところ、既成の法学部・政治学部系統に完全に乗るわけではなく、その原点に当たる部分から未来社会を再構築してみようと考えています。

『「未来創造学」入門』1

未来社会を見通した場合、「どのような政治体系が望ましく、どのような法律体系が望ましいのか。また、その根源にあるものとして、どのような政治哲学ないし法律哲学、あるいは、行政理念等が必要であるのか」ということには、なかなか決めがたく、難しいものがあるのです。

『「未来創造学」入門』1

「政治の哲学」、あるいは「法律の哲学」「法哲学」の根本において、「人間を、自由の状態に置いた場合、立場が上に上がっていけばいくほど、人間的に立派になる。そして、その人がやることを、ほかの人がまねしても社会がよくなる」という観点が大事であり、そういう方向に導かれている社会がつくられていくことがよいでしょう。
法律や政治制度も、その方向で運営されていかねばなりませんし、税制、あるいは、立法も含めて、そのように考えていくことが望ましいと思います。
そうした方向性を一定の視点として持ちながら、新しい法律の作成や、政治の判断、行政行動等をなさねばならないのではないでしょうか。
「法治国家におけるあらゆる行動に関して、もう一段高い道徳律、根源的なる考え方から入っていくことが望ましい未来であるのではないか」と述べておきます。
その意味において、宗教的なものも考慮した上での法律学や政治学、あるいは、国際関係学、外交学等がつくられていくことも大事だと考えます。

『「未来創造学」入門』8

霊言で見る学問の定義

【ソクラテス】

学問の始まりは、実は「対話篇」なんですよ。
プラトンとかが、いろいろ記述しているものを見たら分かると思いますが、古代のものにしては非常に大部のものではあるけれども、真理を発見していく過程っていうのは、基本的に対話篇でなされているものなんですよ。
だから、それ自体は、必ずしも体系的なものではありませんでしたね。（中略）
真実の中身を覆っているもの、外側の覆いの部分を取り除いていくこと。これによって真実が現れてくる。まあ、そういう知的な作業をすることが「学問」ということになりますね。
ある意味においては、学問とは「産婆術」でもあるわけで、まあ、哲学とも同義かと思いますけれども、哲学っていうのは、哲学自体というプロセスがあるんじゃない。母親が赤ん坊を産むときに、産婆がそれをお手伝いする。本来、自分で産み落とす力はあるんだけれども、それを介添えして、手伝って、産湯を使わせて、取り上げる。このお手伝いをするところが、「学問の機能」だと思うんですね。

赤ん坊そのものは、学問をつくることはできないんですよ。それは、つくるものではなくて、存在しているものなんです。もうすでに、この宇宙に存在している真理を、どのようにして発見するかということなんですね。

その存在しているものを発見する方法の一つとして、やはり、間違っているもの、真理に反するもの、あるいは、知識人だと思って自分を偽って飾っているけれども、それが偽物であるということなどを、ピンセットでつまんで、その“偽物の皮”を剥がしていく。まあ、そういうことによって、「真理」が明らかになってくるという過程なわけですね。

われわれの考えは、「学問っていうのは、もともと、神様が創られた世界の真理を明らかにすることだ」というものです。これが学問の定義です。「神様が創られた世界の真理を明らかにすることが学問である」ということです。

この地上においては、いろいろな被り物や覆い物があって、あるいは、砂や埃にまみれたり、布きれで巻かれたり、衣装を着ていたりして、いろいろな物で隠されていることが多いので、その覆いをどうやって取り除いていくか。そして、真実に到達していくか。これが学問であるという考えですね。

『ソクラテス「学問とは何か」を語る』2

「哲学とは何のためにあるか」ということですけど、やっぱり、「善を求めること」ですよ。徹底的に善を求めることなんです。「善を求める」ということが、結局、「幸福の基」なんです。

そして、「人間が幸福になる」ということはどういうことかと言うと、やっぱり、「善を求めて生きる」ということなんですよ。善を求めて生きることが幸福なんです。これが、哲学が、人間を幸福にするためにあるものだということなんです。

だから、善を求めて生きる、「その善とは何か」ということを探究していくのが、「愛知者の使命」であるわけですね。

『ソクラテス「学問とは何か」を語る』5

「最高の哲学」は「最高の宗教」と一致するはずです。

『ソクラテス「学問とは何か」を語る』5

あなたがたがやっているものでも、自分たちの研究論文集みたいなものをつくったり、出したりしていますが（注。二〇〇九年以降、人間幸福学研究会より論文集「人間幸福学研究」を通巻二二号発刊している）、その時点で早くも、私の時代から“二千年飛んで”しまったような、何と言いますか、「真理がまったく通らないもの」がいっぱい出来上がってきていますわねえ。

いわゆる、この世的な学問作法に則ってやったら、まったく分かりやすい話が全然分からないような話になっている。とにかく、“つぎはぎ”と「注」をつける技術だけを教えているようなことがあって、読むに読めない、読むに堪えない文章ができてきて、読んでも意味が分からないということがある。

元の文はどうかというと、元の文を読んだら、言っていることがよく分かる。それを分からないように“加工”する。そうすると賢く見える。こういう詐欺商法まがいのものが、世の中に出回っているわけですよ。

あなたがたにそれを言ったら、気の毒だから申し上げないけども、世間のまねをすれば、そういうことが起きる。「詐欺商法まがいではあるけれども、教えている相手が少ないから許されている」と。まあ、こういうことであるわけですね。

それに関連して、「たくさん勉強して時間をかけたから、その分で許してくれ」ということで、「授業料があまり上がらないで済んでいる」ということですね。

『ソクラテス「学問とは何か」を語る』10

あなたがたも「新しい学問」を目指しておられるんだと思いますし、人気が出れば嫉妬も出るけれども、やっぱり、基本的には、「人が集まってくるか、こないか」だというふうに思うんだよね。同じ真理を扱っていても、その教える人の力によって、人気が出るものも出ないものもあるでしょうね。

そのへんは正直なものですから、幸福の科学だからといって、みんながみんな人気が出て、評判を呼んで、人がたくさん集まっているとは言えないと、私は思いますよ。特に、あなたがたの支部長さんだとか館長さんだとかは、一部、人気のある人もいるかもしれないけども、全般的には、“普通の世界”にいるレベルぐらいの人が多いようには見えるわね。

『ソクラテス「学問とは何か」を語る』10

間違いの始まりは「うぬぼれ」から来ると思うんですよ。「自分は直接先生の教えを聴いている」とか、「その本を読んでいる」とか、そういうことから、「自分は偉いんだ」と思ってうぬぼれる。まあ、うぬぼれてもいいぐらいに実力がある人の場合もあるけども、たいていの場合、そのうぬぼれが過剰な部分に、何かの間違いが入るんですよ。この間違いの部分が、だんだんに“工業排水”みたいになって流れ始めていくということですねえ。

そういう意味で、「うぬぼれを防ぐには、謙虚さというのが常に大事だ」ということだと思いますね。

『ソクラテス「学問とは何か」を語る』11

【マックス・ウェーバー】

思想として、「職業としての学問」を説くときには、やっぱり、専門家としての学者には、「研究者としての立場」と「教育者としての立場」との二つがありますので、その立場をつくるためには、「何らかの専門を持たなければ無理だ。専門を深く掘り下げて、一般の人の十倍以上の知識を持っていないと専門家としては立たない」ということは言えるけどもね。

ただ、その“専門バカ”になってしまって、社会の構造も人間全体も分からなくなったら、それはおしまいですよね。自分が専門にしたものが、だいたい、すべてを動かしているような気になってしまう傾向がありますからね。

『マックス・ウェーバー「職業としての学問」「職業としての政治」を語る』2

「いったん拡散したものを統合する」というのは、ものすごい超人的な能力が要るんですよ。「深く専門的なところまで穿ち入ったものを、統合した目で、もう一回、鳥瞰して見る」というか、「俯瞰して見る」というのは、天才的な能力が要るんですよ。「そこまでの頭脳を与えられている人」となりますと、すごく限られているんです。先天的に言えばね。

「後天的な作業で、そこができるか」ということになりますと、メソッドとして、「簡単に誰もができるようなメソッドがつくれるか」といったら、それは、ほぼ不可能に近くて、期待すべきは、やっぱり、長年にわたって、コツコツと掘り続けていく以外に方法はないですよねえ。

そういう意味で、(学問を全体的に見る目を得るのは)「難しい」ということをある程度、知らなきゃいけないし、学問に対して、幅広い意欲を持てば持つほど、「世俗内的禁欲」が要る。あるいは、「『断念』ということが、実は、学問の推進に役に立つ」という逆説が成り立ってしまうんですよね。

『マックス・ウェーバー「職業としての学問」「職業としての政治」を語る』3

「未来創造コース」かなんか知らないけど、幸福の科学大学（ＨＳＵ）が研究するものがあるとしたら、やっぱり、「近代の政治原理や政治システム以外のやり方がありうるのかどうか」ということへの研究でしょうね。

あるいは、西洋、欧米や日本なんかがやった、ここ百年、二百年の成功モデルはあるけれども、これから続いてくる後進国、発展途上国たちは、同じモデルを踏襲すればよいのか。あるいは、先進国が、その先で滅びていく、衰退していくというなら、何か違ったコースを選ばなければならないのかどうか。やっぱり、このへんの未来社会システムの設計を研究しなければいけないでしょうね。

『マックス・ウェーバー「職業としての学問」「職業としての政治」を語る』8

【ヘーゲル】

宗教、神学、哲学があって、その下に、その他の実用性のある学問があって、そのさらに下に科学がある。

だから、物を扱って、研究してるやつな。それは科学だろうと思うが、もう、それはいちばん下だわな。

学問の体系のなかでいちばん底辺だ。だから、「底辺の者が、全部、上の者をチェックできる。規定できる」っていうような考え方は、まあ、マルクスみたいな考え方だな、基本的になあ。

『ヘーゲルに聞いてみた』2

「肉体を中心に生きている者であるか、そうでないか」ということの“踏み絵”が学問だと思うんだよな。だから、学問をやってない人間は、要するに、動物と同じように、肉体を中心に物事を考えて、生存を中心に考えるようになる。

学問をやった人間は、「そうした肉体的生存だけでは恥ずかしいことだ」と考えるようになって、「もう少し高尚なものの考え方ができないと、人間としての条件を満たさない」というように考えるようになる。

こうして、二種類の人間ができるようになるんだなあ。

だから、宗教は大事なんだよ。大事なんだけども、神や、神が起こしているもの、あるいは、起こしてきたものを、やっぱり客観的に叙述することは、とても難しいことなんだよな。それは「哲学の使命」であって、どうしても観念論的なものになるので、それを理解するために、さらに分解していって、さまざまな「実用の学」ができてくるんだろうと思うんだよな。

そういうものが分かるように、例えば、法学や、政治学や、経済学や、社会学や、いろいろなものに分かれていくんだろうと思うんだけどな。

『ヘーゲルに聞いてみた』3

大川隆法総裁が書いた本で、おたくの弟子が論文を書くと、さっぱり分からんものに変わっていくんだろう？　すごいですねえ。これは、“錬金術”の反対だよね。（中略）

「教員」と称してそれをやるから、気をつけたほうがいいよ。

本当に気をつけたほうがいい。教員を選ぶときには、文科省の基準なんか、全然気にしないで、ちゃんと、曲がらないようにしていく人を中心にしないと、危ないと思いますねえ。

世の中には、あまりにも自我が強くて、勝手に解釈して捻じ曲げていったり、自分なりにウニャウニャにして、勝手に迷路をつくっていくようなタイプの、頭が“迷路”になってる人もいるから。そんな人の頭のなかに入ったら、とんでもないものが出てくるので、気をつけたほうがいいね。

『ヘーゲルに聞いてみた』4

昔なら「大学を出た」とか、あるいは、「大学の教授だ」というようなことで、知の独占者が存在できたけども、今は知識が拡散しているがゆえに、いろんな人がいろんな知識を得られるようになったので、渾沌とした状況になってはいくだろうね。

そういう意味では、緩やかな、知識における平等性が始まっていくだろうとは思うんだけども、その平等性のなかで、今言ったように、「時間を活かす者」と「時間を殺す者」の違いがはっきりと分かれてくるようになるだろうね。

『ヘーゲルに聞いてみた』9

【アリストテレス】

東京大学みたいなところだって、例えば今、国際政治にあたって、「結論」を出せるような人なんか、たぶん、ほとんどいないんじゃないか。

哲学の先生なら知ってるかと思って聞いたら、「ギリシャ語は知ってる」とか、そういうレベルじゃないかな。ドイツ語が読めるとかギリシャ語が読めるとか、実を言うと、そういう文学者あるいは言語学者であって、哲学者ではない。翻訳ができるぐらいのレベルで止まっている。

「現代、ただ今のことについて意見が言えるか」というのは、やはり、哲学者としての「見識」の部分でね。それが言えないと思うんだよなあ。

やはり、現代、ただ今の問題には「答え」を出せなければならないと思う。そのためには、古来からのいろんな歴史や思想を勉強していくことは、非常に大事なことだわねえ。うん。そう思うね。

『アリストテレスはかく語りき』7

（学問の統合について）現代ほど学問が細分化し専門化したなかにあっては、それなりの難しさはあると思う。私たちの時代の「諸学問の統合」……というか、自分で創造した学問がかなりありますけどね。今は専門分化して、「細かい分野で、ずっと掘り下げていく」という意味での専門家がかなり多いので、そういう意味での統合は、かなり難しいところにある。

やはり、「根本理念」にあたるものでないと、統合できないところはあると思うんですね。これだけ千変万化し、広がっている学問を統合するというのは、本当に超人的な、天才的な能力を必要とするので、現実にできないでいるわね。日本に、その学問の統合ができるほどの人がいるかどうかといったら、一億人いたって、なかなか一人、そう簡単に出てこないものなんで。それぞれのジャンルで天才風の人が出ることは可能だけど、ほかのところまではいけない。（中略）

でも、いろんな学問に関心を持つことは大事で、そのなかにある「普遍的なるもの」というかねえ……。

「なぜ、神様が、こういうものを創られたのだろうか」という立場から、観点から、諸学問を洗い直していくことなんですよ。「なぜ、こういうものがあるんだろうか、必要なんだろうか」ということですね。それを考えていくことが大事だし。

『アリストテレスはかく語りき』8

【緒方洪庵】

「温故知新」的なもので、伝統的価値観のなかで重要とされるものを体現した部分が、一部、必要なんだね。ただ、それだけでは勝てない。やっぱり、最先端の学問、ないし、技術や情報、そういう先端的なものを何か持ってなければ勝てないところがあるので、その両方を持たなけりゃいけないと私は思いますね。

まあ、そのへんが「学問の本道」だし、あるいは、別な言葉で言やあ、「革命の本道」だわな。

『緒方洪庵「実学の精神」を語る』3

以上